

## 今日の説教のポイント <マタイによる福音書 11 章 28-30 節>

①救い主キリストの招きが、全く無条件に「だれでも」ではなく、「疲れた者、重荷を負う者」に向けられているのは、どういうこと？

人はだれでも、いろいろな重荷を負ってその人生を歩んでいるのではないのでしょうか。主がこの招きの言葉を語られたとき、「重荷を負って疲れている者」とは、直接には、律法の厳密な戒律を果たせないで精神的に苦しんでいる者のことを考えておられたのだと言われます。しかし今日の私たちは、この人生の重荷をもう少し拡大して考えてよいかもしれません。体の衰えや病への心配、生活苦や人間関係の複雑さなどなど、人生の重荷は尽きることがありません。それに加えて、いつの時代のだれでもが、墮罪の現実の中に罪の重荷の下にあるのです。そういう意味では、主イエスの招きはすべての人に向けられています。

そうであるのに、それに気づかなかったり、気づいていても素知らぬふりをしたり、そんな招きは不必要だと強がってみせたりする人があります。そういう人にも主の招きの言葉は語られていないわけではないのですが、現実には聞かれず、必要ないものとされて、語られていないに等しいのです。主の言葉は、「知恵ある者や賢い者には隠され、幼子のような者に示されます」(25 節)。主の招きは、幼子のように自分が自力だけではやっていけないことを素直に知って心の底から主に信頼し、主の助けを仰ぐ「だれでも」に向けられているのです。

②その招きの主のもとに来るだれでもに、「休み、安らぎ」が約束されている。

「休み、安らぎ」の原語は同一の語で「ピーンと張りつめていた弦が緩められること」を意味していると説明している人があります。そうです、主のもとに来るだれでもが、張りつめた思い煩いや不安、罪の自覚とそれに対する神の裁きを恐れる緊張から解き放たれ緩められてホッとすること、休み、安らぎを経験するのです。何の内実もない救いの空言を吐く救い主が次から次へと出て来る世の中であって、主は「この私は(原文は非常な強調)、あなたたちを休ませてあげよう」とはっきり約束してくださっています。「わたしは柔和で謙遜な者だから」というのがその約束の確かさの根拠です。この言葉の背後に、人々の罪咎を負って黙って死んで行く苦難の僕の姿が感じられます。主は御自分の十字架の死を前に見つ、あの死をもって人々の罪を贖う柔和で謙遜な救い主として裏付けと内実のある休み、安らぎを約束してくださっているのです。私たちは心深い平安を得るため、「罪も咎もあるまま来りひれ伏せ」ば良いのです。

(日本キリスト教会教師 桑原 昭)